

国際協力特別賞

小さな地球

福岡県立育徳館中学校 2年 小川 陽翔

久米島。僕が三才から小学校卒業まで暮らした、人口七千人ほどの小さな沖縄の島。でも、そこにはアメリカ、フィリピン、中国、ペルー、ブラジル、スウェーデン、ベトナム、いろんな国の人達が住んでいた。さらに、世界中から美しい海や、そこにしかない景色を求めて、観光客もたくさんやってきた。その頃は当たり前だと思っていたけど、僕の小学生時代は今よりも国際的だった。

母は旅行が好きで、「世界は広いけど、意外と近い。」が口癖で、それを証明するために、僕をいろいろな国や場所に連れて行ってくれた。でも、なるべく交通費は安く、現地の人と同じ様に生活したり、食べるのが基本のルールだった。あと、挨拶を現地の言葉で必ず最初に覚えて、それを笑顔で言うこと。旅行というより社会見学に近かったかもしれない。僕は地元のスーパーや、市場が好きだった。見たことのない野菜もあれば、島で沢山獲れる魚もあった。何て書いてあるのかわからない袋のお菓子や、変わった果物を買って食べたりもした。もちろん全部が美味しかったわけではないけど、味覚や生活習慣、人の雰囲気など似ているところと、違うところを見つけるのが楽しかった。ある国は考え方や全てが違うように感じたし、ある国はまるで、久米島を国にしたようだと思ったりした。そして、見慣れた小さな空港にたどり着くと不思議なことに、出発する前より、いい島に思えたのだ。いや、正しくは島のいい所を見つけられるようになっていたのかもしれない。

島に住んでいた外国の人達は、みんな島が好きで、行事などにも積極的に参加していた。さらに自分の国の技術や知識、特技などを島の人たちに教えてくれたりした。もちろん、彼らは島の人たちから、たくさんのことを学んでいた。どちらが上でも下でもなく、お互いの考えや、やり方を尊重し、一番良い方法を考え、歩み寄るところは歩み寄る。困った時は助け合う。歴史は大切にしても、古くて必要のないことは新しく変えていく。生まれや育ったところは違ってもみんな、「久米島んちゅ」だった。もしかすると、あの島は、小さい理想的な地球だったのかもしれない。

沖縄では、人とお茶とお菓子が揃えば、「ゆんたく」が始まる。おしゃべりするという意味だ。あの頃は、大人って、よくずつとしゃべってられるなと思っていた。でも今は、いろんなところから来た人たちが、自分のことを知ってもらったり、相手のことを理解したりするための、とても重要な時間だったんじゃないか、と思う。だって、みんな笑顔だったから。どんな国に行っても、その言葉で明るく挨拶し、その国の一番人気の飲み物と、お菓子をつまんで、「ゆんたく」すれば、きっと相手のことをもっと知りたくなるに違いない。たぶん、一歩目なんて、意外と簡単なことなのかもしれない。